

島田正治

明日二月六日、家内が一時日本へ戻るの、急ぎこの稿を書いて日本へ持って行ってもらい投函してもらおう。その方がうんと早く着く。また安全である。今は二月だが、本誌に掲載されるのが四月号となる。最近、とみにメキシコの郵便事情が悪くなってきたように思う。数年前までは毎日、郵便配達車が来た。それが、やがて一日おきとなり、一週間に一、二度となった。元村長だったエベラルド氏宅が代行、聞くと全く報酬がないという。ついにいや気がさしたので、昨年暮れにやめることにしたらしい。

一月になって、村の局が閉じたので、こんどは隣町のアヒヒ局まで行かなくてはならなくなった。歩いて村からゆうに三十分はかかる。バスもある。困ったのは村人ばかりではない。わずか三人ほどの従業員がいるだけのアヒヒは予期せぬ仕事がふえて、狭い局内に郵便物を取りにくる人でいっぱいになった。

二月になった。郵便局へ行くと、こんどは元のサンアントニオ村に戻ったという。場所を聞くと、これがまた村はずれ、マヌエル氏宅で、雑貨商を営んでいる。わたしの住いからは、前のエベラルド氏宅より一丁ほど近くなったが、場所が村の中心地にないので困る人も多い。マヌエル夫人も、急にたのまれて郵便を扱うようになったが無報酬、つまりボランティアだと話していた。それで毎日、一日一回、手紙の配送されてくるぐあいがどんなかと様子を見に行くのだが、以前、閑散としてあまりお客がなかったこの店も、けっこう人の出入りが多くなっている。手紙の受取りだけでなく、銀行の知らせ、電話の請求書などもきている。

わたしなども、ただ手紙がきているかどうかを確かめるに立ち寄る。そのついでに牛乳を買ったりパンを求めたりする。これは、無報酬の郵便局の代行だが、お客がたくさんくるから、かえって収入がふえたのではないかと察せられる。逆に以前、郵便を扱っていたエベラルド氏宅は客がぐんと減ったことはいなめない。いつ通っても、人の影が少なくなった。

ちなみに、日本からの手紙は約一か月かかっている。多分、メキシコに着いてからの事情がよくなりにきまっている。国が広いのと労働者不足だろう。ひとつの例をあげると、日本からメキシコまでは航空便で多くて一週間は要しない。そして、チャパラへ。これも一週ぐらいみておけばよい。問題はその後である。

ごていねいにも日本から届いた手紙類に、チャパラへいつ着いたとの消印がある。見ると、チャパラ局からアヒヒ、そしてサンアントニオ村まで一週間から十日かかっている。すぐそこに来ているのにと思う。まことに腹立たしいしいことといわねばならないが、メキシコ流でいくと、そんなにいらいらする必要もないだろう。手紙が無くなったそれは問題だが少しぐらい日数がかかっているが、ちゃんと着いているではないか。日本人よ、そう腹を立てないでと諫められるにちがいない。(つづく)

ご意見・ご感想はこちらまでお送りください。